

I P M実践指標モデル (かんきつ)

| 分類 | 管理項目 | 管理ポイント | 点数 | チェック欄 | | |
|---|--|---|--|-------------------|---|----------|
| | | | | 昨年度の実施状況 | 今年度の実施目標 | 今年度の実施状況 |
| 予防 | 病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備 | 植栽密度 (必) | 適当な植栽密度とし、通風、作業性をよくするとともに、農業散布の死角をなくす。 | 1 | | |
| | | 防風ネット等の整備 (必) | ほ場周囲には、防風垣を整備するか、防風ネット等を設置し、強風による病害の蔓延を防止する。 | 1 | | |
| | | せん定 (必) | せん定時に越冬病斑、枯れ枝などを除去する。 | 1 | | |
| | | | せん定クズはすみやかにほ場外に持ち出して処分するか粉碎して感染源を減らす。 | 1 | | |
| | | | 夏秋枝はすみやかに除去し、かいはう病等の感染機会をへらす。 | 1 | | |
| | | 草生栽培 | 草生 (ナギナタガヤ等) 栽培をし、雑草の繁茂や泥のはねあがりを防ぐとともに、カブリダニなどの天敵の生息場所とする。ただし、樹冠下は除草し、ゴマダラカミキリによる産卵を抑制する。 | 1 | | |
| | | 害虫寄生植物の管理 (必) | チャノキイロアザミウマ等の増殖・飛来源となる植物では夏季の発芽を抑制するよう、枝の刈り込み時期に注意する。 | 1 | | |
| | | 収穫果の取扱い | 収穫時は二度切りにより軸を短く調整し果実の傷害を防ぐとともに、収穫、調整時及び保管庫内では果実を丁寧に扱い、果実腐敗の発生を最小限に抑える。 | 1 | | |
| 判断 | 防除要否、タイミングの判断 | 病害虫発生予察情報の確認 (必) | 病害虫防除所が発表する発生予察情報を入力し、病害虫の発生状況を確認する。 | 1 | | |
| | | 防除適期情報の確認 | 病害虫防除所が提供するチャノキイロアザミウマ、黒点病の防除適期情報を確認する。 | 1 | | |
| | | 気象情報の把握 (必) | 黒点病：温州みかん等の罹病性品種では開花30日後にあたる6月上中旬から防除を開始し、前回防除からの累積降水量 (250~300mm) を把握し、適期防除に心がけ、防除時期を決定するとともに最少の防除回数となるようにする。 かいはう病：中晩相等の罹病性品種では3月下旬から防除を開始し、発生状況に合わせて前回防除からの累積降水量 (銅水和剤では200~250mm、抗生物質剤では10日間程度) や強風雨 (台風等) の状況を把握し、適期防除に心がける。 | 1 | | |
| | | 生育状況の把握 | そうか病：ほ場を観察し、適期 (萌芽期) 散布に心がける。 灰色かび病：開花状況を把握し、開花盛期に防除を行う。 | 1 | | |
| | | 病害虫・雑草の観察 | ほ場には必ずルーベを持って入り、病害虫や天敵の発生や生態を観察する。 | 1 | | |
| | | | ほ場と周辺の雑草の状況 (草種、発生量) を観察し、把握する。 | 1 | | |
| | | トラップの設置 | 黄色粘着トラップ等により、ほ場での害虫や天敵の発生動態を知る。 | 1 | | |
| | | 防除 | 生物的防除 | 生物農薬の使用 | 灰色かび病：パチルス・ズブチリス製剤を使用する。 ゴマダラカミキリ：ポーベリア・ブロンニアティ剤 (バイオリサ・カミキリ) を使用する (産卵防止金網等を実施した場合は不要)。 | 1 |
| 土着天敵の活用 (必) | ミカンハダニ、カイガラムシ類等：土着天敵に影響の少ない薬剤を選択する。 | | | 1 | | |
| 導入天敵類の使用 | カイガラムシ類：近隣の天敵発生ほ場から天敵を導入する。注1 | | | 1 | | |
| 耕作的防除 | 枝吊り、マルチ | | 褐色腐敗病：枝吊りや敷き草 (マルチ) を行い、果実を地表より離す。 | 1 | | |
| | 物理的防除 | | 捕殺 | ゴマダラカミキリ：成虫を捕殺する。 | 1 | |
| 産卵防止策 | | | ゴマダラカミキリ：シュロ織紐や金網などで主幹地際部をおおい、産卵を防止する (生物農薬 (バイオリサ・カミキリ) を使用した場合は不要)。 | 1 | | |
| 光反射シートマルチ | | | チャノキイロアザミウマ、雑草：白色の光反射シートでマルチを行う。7月より実施。注2 | 1 | | |
| | | | チャノキイロアザミウマ、雑草：白色の光反射シートでマルチを行う。9月より実施。 | 1 | | |
| 炭酸カルシウム微粉末剤の散布 | チャノキイロアザミウマ：炭酸カルシウム微粉末剤 (ホワイトコート) 25~50倍を梅雨明け前 (6~7月) に1~2回散布し、チャノキイロアザミウマ用殺虫剤を削減する。 | | 1 | | | |
| 化学的防除 | 薬剤の選択 (必) | | 農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用せず、農業工業会が提供している作用機作による農薬の分類 (IRAC、FRAC) を確認する。さらに、当該地域で薬剤抵抗性が確認されている農薬は当該地域では使用しない。 | 1 | | |
| | 散布量の決定 | | 十分な薬効が得られる範囲で、最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定する (薬剤散布後の残液が出ないように薬液を調整する)。 | 1 | | |
| | 散布方法 | | 農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。 | 1 | | |
| | | | 防除は早朝か夕方の無~弱風時を選んで行う。 | 1 | | |
| | 散布後の処理 (必) | | 散布器具、タンク等の洗浄を十分に行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。 | 1 | | |
| | マシン油乳剤の散布 | ミカンハダニ、カイガラムシ類：冬期 (12~3月) にマシン油乳剤を使用する。(必) 注3 | 1 | | | |
| ミカンハダニ、ミカンサビダニ：発芽から開花期前 (4月中下旬) にマシン油乳剤を使用する。 | | 1 | | | | |
| ミカンハダニ、カイガラムシ類：幼果期 (6月) にマシン油乳剤を使用する。 | | 1 | | | | |
| その他 | 作業日誌 (必) | 各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。 | 1 | | | |
| | 研修会等への参加 | 県や農業協同組合が開催するI P M研修会や防除研修会等に参加する。また、研修会等の内容は、家族や作業者等へ周知し、情報共有する。 | 1 | | | |
| | | | 合計点数 | | | |
| | | | 評価結果 | | | |

* (必) と記述している管理項目については、必ず管理項目として設定しチェックする。

注1 イセリヤカイガラムシにはベダリアテントウ、ヤノネカイガラムシにはヤノネキイロコバチとヤノネツヤコバチ、ルーベロウムシにはルーベアアカドリコバチ、ミカントゲコナジラミにはシルベストリコバチを放飼する。なお、導入元は県内に限る。

注2 7月からマルチを実施した場合は、チャノキイロアザミウマに対する化学的防除は省く。9月以降も引き続きマルチを行った場合は、下段の項目を実施したものと見なす。

注3 12~3月に収穫する品種は、収穫後 (12~3月) に散布する。寒害を受けやすい地域では1月中旬~2月の散布は控える。